
きっかけをひろったなら

優芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きっかけをひろったなら

【Nコード】

N5926D

【作者名】

優芽

【あらすじ】

日和は、消しゴムを拾ってくれた宮野君に一目ぼれ。両思いになりたいと強願うのだが……？

（前書き）

文章がおかしいです……
だけど、私なりに一生懸命書きました！
見てやってください。

「西野？これ…お前の？」

「え？」

私は、にしの西野 ひより日和高校2年だ。

ずっと探していた消しゴムを見つけてくれたのは……………。

みやの宮野 りくえ陸衛君でした。

「あ、ありがとう。」

私は、軽く頭をさげた。

宮野君が教室から出て行った後に……私は、独り言を、ポツリとつぶやいた。

「単純だな。」

私が宮野君を好きになるのに、

そんなに時間はかからなかった。

私は、宮野君が好き。

私一人では、うまくいくはずがない。

『……で？何があつたの？』

私は、親友のなぎさに電話した。

なぎさは、もう付き合つて半年ほど経つ彼氏がいる。

なぎさによると、他校の人らしいが……。

『えっと…好きな人が……。』

少し恥ずかしくなり、言い出せなかった。

『ん？好きな人できたとか？』

『……………。』

『図星か。』

電話の奥で、なぎさが笑っていた。

『あはは…。』

『相手は？ん？同じクラス？』

『うん。同じクラスの……み、宮野君。』

『…………。』

沈黙が続いた。

『まぢろ！?!?!日和、やっと好きな人できたね。』

一瞬、沈黙になり私は焦ったが、その後のなぎさの明るさに、ほっと思った。

『うん！協力、してくれる？』

『あ、当たり前じゃん！』

そこで私は安心し、一端、電話を切った。

早く、明日になれ。

宮野君に、会いたいな。

ע...עד עד עד עד עד

「あ……。」

私は、電話を切ったあと、寝てしまったのだ。

「やばッ……」

私は、急いで準備した。

「行って来まーす！」

宮野君……。

恋って……不思議かも。

「ひーより!!」

後ろから私の目を、覆う。

「なぎさ!？」

なぎさは、ニコっとぶいサインをした。

「あッ!」

なぎさは、前方を指差した。

「日和!あそこ!宮野だよ!」

私の耳元でなぎさは、言った。

「ほ……本当だ……。」

私の頬は赤くなった。

「ほーら!『おはよ!』って言いなよ!」

なぎさは、私の肩を押した。

「えー!?!いいいいよ……!」

私は、少し困った表情を浮かべた。

結局。

話せないまま、1日が始まった。

「宮野くん！」

朝っぱらから宮野君の周りには、女の子が集まっていた。

宮野君は、モテるんだ。

「……………」

宮野君は、かっこいいし、スポーツも出来る。

モテるのは当たり前だ。

でも、モヤモヤする。

イライラする。

何だろう？この気持ち……。

「ね？なぎさ？」

私は、なぎさに寄り添った。

「ん？」

「あの、宮野君の周りに居る女の子達を見ると、モヤモヤするの。」

真剣な私を見て、なぎさは笑った。

「ぶ……。」「

「なッ！何〜！？何で笑うのよ？」

「あんたさ〜……そんな事も分らないの？」

「へ？」

「それはね？嫉妬ってゆんだよ？」

「しつと？」

「好きな人が出来るとね？他の女の子が、自分の好きな人とちよつと話しただけでイライラしちゃうのよ？他の女の子と話されるのは、嫌でしょ？」

「…………嫌だ！」

「ね？話してほしくない。と思う気持ち……大切だと思うな！」

私がしている事は……嫉妬とゆーもの。

恋してる人しか味わえない……嫉妬？

「私！大人になった！？」

ぽかんとしたなぎさは、笑いをこらえなくなったのか……

「あははははははは！なったなっ！」

「そ！そんなに笑わなくてもいいじゃん！」

7月5日

私は、一つ、なぎさから大切な事を学んだ。

「サッカー部って大変ですか？」

朝、私は鏡に向かって独り言を言っていた。

「サッカー部って大変ですか？」

大きく私は、深呼吸した。

「大丈夫。宮野君に話しかけるんだ！」

そう。

さっきの独り言は、宮野君に言う言葉を練習していた。

「落ち着け日和！」

玄関を開けて、外に足を踏み入れた。

恋は、自然と幸せになれる。

すごいパワーだ!!

すると、前方にはフェンスに腰かけているなぎさがいた。

「あ! なぎさ!!」私は、なぎさ目掛けて、手を振った。

「あ! やつと来た!」

「ん?」

なぎさは、フェンスの先を指さした。

「あそこ見てみ？」

私は、なぎさに従ってフェンスを見た。

「あゝ！」

私は、声をあげた。

なんと！そこに居るのは、宮野君であった！

「何してるの？あれ。」

「今からサッカーの試合があるんだよ。」

「こんな時間から！？」

私の時計は、7：15を示していた。

「宮野君、時々学校さぼるからね」

「え！？そーなの？」

私はびつくりした。

「うん。あれ、部活での試合じゃないんだよ。」

「それじゃあ、あのチームは？」

なぎさは、目を細めた。

「あれは……お誘いじゃない？」

「お誘い？」

「宮野君、ずば抜けてサッカーうまいから、他の高校からお誘いがくるんだよ。」

私の知らない宮野君……。

何でなぎさはそんなに知っているの？

もしかして……。

なんて

なぎさには彼氏がいるし、他校だとも言ったし。

「あゝそれにしてもカッコいいな」

「おゝい？学校始まるけど？どゝすんの？」

なぎさは、私の顔を覗き込んだ。

「えっ？まだ見ていたいの？」

「……………。学校さぼる？」

なぎさから思わぬ発言が！

「なぎさってそんなに悪かったわけ？」

すると、なぎさはほっぺを膨らませた。

「私、学校行くからね？」

「えっ？」

チラッと私は、後ろを見て…………。

なぎさと一緒に学校へ向かった。

「ね？なぎさ？今日、宮野君、学校来ると思う？」

「さ？来ないんじゃない？」

なぎさは、少し意地悪な笑顔で、こう言った。

「来ないのかな？」

私は一気に沈んだ

「もー！！マイナス思考やめなって！日和の悪い癖だよ？」

「だって！なぎさが来ないって言ったんじゃん！」

すると、なぎさは

「絶対来るよ！！って、言い返さないよ」

と、また意地悪な笑顔で言った。

なぎさの言つとおりかもしれない。

「よし！これからは、プラス思考で頑張るぞ！」

「あんまりプラス思考になっても困るけどね」笑

なぎさと恋話をしながら学校に行くのは、楽しかった。

4 時間目

教室のドアがいきおいよく開いた。

皆の視線が、ドアに行く。

私は、『もしかしたら』と思った。

が。

違った。

隣のクラスの先生だった。

「東先生！大変です！」

何か事件でもあったのか……………？

「宮野が！宮野が！他校と喧嘩を！」

ざわッ
……

私は、目を大きくあけた。

「み……宮野君が？」

私は、ボソッと呟いた。

皆がパニック状態のところだ。

先生が「静かにしなさい！」と何回も言っている。

足が勝手に動いた。

学校の階段を降りて、靴箱を通り過ぎた。

あのフェンスへ行けば………何か分かるはずだ!!

そのフェンスへ行くと………。

宮野君が水道で顔を洗っていた。

「み…宮野君？」

私は、横から思い切って話しかけた！

「あ？」

怖い目で宮野君は、私を見た。

「えっと……喧嘩したって聞いたから……大丈夫かな……って。」

すると、宮野君の動きが止まった。

「で？」

「へ？」

宮野君は、鋭い目で、私を見た。

「お前には関係ないだろ！？いちいち首突っ込むな！！」

宮野君の声が、グラウンド中に響き渡った。

「あ、その……」

私の目から涙が出てきた。

それに気づいた宮野君は、焦っていた。

「な……なんで泣くんだよ？」

宮野君が、困った顔で私を覗き込む。

「び……びっくりした……。」

私は、手で顔を覆った。

「……………」

沈黙。

沈黙をやぶったのは、宮野君だ。

「ww悪かったよ。」

ん！？今……。

「ごめん。あの、言わないでほしんだけど……」

宮野君は、照れた。

「え？何？」

私は、宮野君を急かした。

「他校の奴と喧嘩した理由なんだけど……」

この時、私は心臓が止まるくらいのショックを受けてしまった。

「彼女のためにやったんだ。」

「え？」

私の目は、もはや死んだ魚のようだ。

「俺の彼女、他校にいたんだけど……その彼女が　　「もういいよ。」」

私は、宮野君の話を最後まで聞かなかった。

「は？なんだよそれ。お前が泣くから話してやったのに！」

何で泣いたか分からないの？

好きだからだよ？

宮野君の事好きじゃなかったら……泣いてなんかない。

「もついいよ。」

宮野君は、頭をかいた。

「彼女……いたんだ？」

私は、自分が傷つくのが分かっているながら、宮野君に質問した。

「……。それは、皮肉か？」

「そんなんじゃないよ。」

「あ、学校戻らないと。」

私は走った。

息がきれるくらい走った。

「ば……馬鹿。」

私は、ある公園のベンチに腰をおろした。

頬に涙がつたる。

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿……。」

しばらくベンチに居て、制服のポケットから鏡を出した。

「あはは……こんな顔ぢゃあ学校戻れないね。」

私は、独り言をポツリと呟いた。

「ムカつくよー！本当に……。」

顔を上げ、空を見た。

「めっちゃ綺麗ぢゃんかー。」

涙目で私は、無理に笑った。

神様？

私は、幸せにはなれないのですか？

それから、どのくらいの時間が経っただろう……。。

「西野！！」

誰かが私を呼んだ。

「ん……。。」

「西野？」

そこに居たのは、宮野君だった。

「何で宮野君がここに居るの？」

私は、ムクツとベンチから立ち上がった。

辺りを見回すと、もう真っ暗だった。

「え！？今、何時！？」

私は、時計を見た。

8：23 と、時計には書いてある。

宮野君だと確認すると、さっきの事で胸が締め付けられた。

走って家へ向かおうとした瞬間……………。

『パシッ!』

宮野君は、私の腕をつかんだ。

「何？離してよ!」

私は、勢いよく手を振り払った。

が。

宮野君の腕は、ビクともしない……。

「まだ、帰らせるわけにはいかない。」

（は？何言ってるの？）

「何で？」

「何が？」

「何で、さっき泣いたの？」

わざとなのか……？

私に好きと言わせる気なのか？

「別に……。目が痛かったの。」

苦しい言い訳だ。

「俺の事、嫌い？」

「さあ？」

もしかして……気づいてる？

「あゝもおゝ!!」

宮野君は、頭をかいた。

「分かった!! 本当に本当の事言っよ。」

(何? また彼女の話?)

「ノロケなんか、私、聞かないから。」

私は、そう言って宮野君に背を向けた。

「その事なんだけど……彼女って言うのは……」

声で言った。

「じゃあ、何で、喧嘩を？」

「……………。カッコ悪いんだけどよ。」

そう言いながら目線を落とした。

「サッカーの試合の時、仲間が怪我させられてよ？それで頭にきて……………つい。」

「何でそこから、彼女の話になったの？」

「友達が、相手のサッカーチームのリーダーの彼女とつたんだ。それで、相手が怒ってから、友達殴られてて、俺が、力っとなって……………」

と、ゆう事は……………。

「彼女って、宮野君の話じゃなくて、お友達の事だったの!？」

「そー……なるかな。」

私は、拍子抜けした。

さっきまで落ち込んでいた自分が恥ずかしい。

「宮野君、国語の成績、悪いでしょ？特に説明文のところ。」

「はー!?何だよそれ!！」

宮野君は、顔真っ赤だ。

全く……。

神様は、私に宮野君を諦めるな！と言っているのか……。

「さして！帰るかー！！」

私は、大きく背伸びした。

「しょうがねーから、俺様を送ってやるよ」

「誰も頼んでないけどねー」

「はあああ！？」

今日の朝の臆病な私は、どこいった？

宮野君と話すなんてありえない事だったのに……。

今ここには、私と宮野君が話してる…………。

並んで…………。

「もう充分です!!」

「いきなり何だよ!?!」

「なんでもない!!」

私は、意地悪な笑顔で言った。

私は変わったんだ

涙が出てくる…………。

よく頑張ったね？

もう笑って？

「ん？お前、泣いてない？」

「ば――カ！」

「何が！？」

好き好き好き。

絶対にとられない。

私がもらってやる。

そう、日和は、決心し………

夜の公園通りを、宮野君と歩いていった。

（後書き）

初めてなので、多々おかしい所もあると思います。

どうか、感想など書いてくれると、次からもまた頑張れますので！
よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5926d/>

きっかけをひろったなら

2010年11月5日07時28分発行